

自動詞構文の強勢と音調

時崎 久夫
札幌大学

0. はじめに

英語の自動詞構文は、主語に卓立(prominence)があるとされ、文末焦点の原則に従わないことから、これまでに多くの研究がなされてきた。小論は、強勢と音調を区別し、詳しく観察することにより、この問題を解決し、さらに述語の一時性・個性の問題にも説明を与えようとするものである。

1. 完全自動詞文の強勢と音調

ここではまず完全自動詞を含む文から考えることにしよう。Selkirk (1995: 559)は、従来の研究に基づき、次のような文は、前提が何もない場合、動詞にピッチ・アクセントが置かれても置かれなくてもよいと述べている。ここではピッチ・アクセントが置かれる音節を大文字で示す。

- (1) a. JOHNson DIED.
- b. JOHNson died.
- (2) a. The SUN came OUT.
- b. The SUN came out.

さらに、これらの文はすべて、文全体が新情報を表しており、次の(3a)に対する答えになったり、(3b)の文の枠に埋め込むことができるとしている。(3b)のFは焦点(focus)を示す。

- (3) a. What's been happening?
- b. I was only thinking that [.]_F.

このように文全体が新情報となる場合でも、(1b), (2b)のように名詞句にのみ卓立があれば十分だという観察である。これが正しいとすると、自動詞構文は、無標の場合は文末に焦点があり、ピッチ・アクセントも文末に置かれるという文末焦点の原則に従わないことになる。そのため、名詞は述語よりも卓立するという別の原則も提案されてきた(Schmerling (1976)を参照)。

しかし、ここではピッチ・アクセントのみが考慮されており、強勢や文全体の音調についての詳しい観察が欠けていることが問題を難しくしていると思われる。まず強勢の点から考えると、英語では無標の場合、名詞・動詞・形容詞・副詞などの内容語(content word)に強勢が置かれ、代名詞・冠詞・前置詞などの機能語には強勢が置かれられないと言われている。そうならば例えば(1b)でも名詞Johnsonだけでなく動詞diedにも強勢が置かれるのではないだろうか。情報の点から見れば、Johnsonとdiedはともに重要な新情報である。このことは、(3a)の問いに対して、次の(4a)のようにJohnsonを代名詞で置き換えると情報伝達が不完全になるし、(4b)のように動詞diedを省略すると答えとして成り立たないということからわかる。

- (4) (What's been happening? (=3a))
- a. ?He DIED.
- b. ??JOHNson.

そうすると(1b)においてJohnsonだけでなくdiedにも強勢が置かれていると考えるべきであろう。そして実際(1b)の例を最初に示したSchmerling (1976: 42)もdiedに第2強勢に当たる記号を付けている。さらに、次に示すようにLondon-Lund corpusから検索した実際の発話例でもdiedに強勢が置かれている。ここでは強勢を「で、音調句(intonational phrase)を()_{IP}で、音調句のonsetを^で示す。

- (5) a. . . . (per^haps the time beFORE)_{IP} (or per^haps it was LAST」time)_{IP} (which was ^three and a
 」half YEARS a」 go)_{IP} (^after MOTHER had 」 died)_{IP} . . .

- b. (‘what」 difference has it MAKE to you)_{IP} (‘when your BROTher」 died)_{IP} (cos ‘this
 」 happened」 fairly REcently)_{IP} (‘DIDn’t it)_{IP}

以上のことは述語が came の (2b) についても同様である。同じく London-Lund corpus から検索した実際の発話例を示しておく。

- (6) a. (well ‘actually」 Andrew LAYman」 came」 round)_{IP} (and ‘SAID)_{IP} . . .
 b. (‘THEN)_{IP} (a ‘very」 strange RUmour」 came to us)_{IP} (‘there was disQUIet)_{IP} (in ‘many of
 the」 Russian cities and TOWNS)_{IP} . . .

これらの例でも came に強勢が置かれている。

よって文全体が新情報である場合は、主語だけでなく述語にも強勢が置かれると言える。すなわち (1b) の発話は次の (7a) であって、(7b) ではないということである。

- (7) a. 」 JOHNson」 died.
 b. 」 JOHNson died.

言い換えれば、(7a), (7b) はそれぞれ次の (8a), (8b) の問いに対する答えとしてふさわしい。

- (8) a. What’s been happening?
 b. Who died?

またもちろん (1a) でも Johnson と died の両方に強勢が置かれるので、ここまですべてを整理すれば、文全体が新情報である場合は次の 2 つの発音が可能だということになる。

- (9) a. 」 JOHNson」 DIED.
 b. 」 JOHNson」 died.

しかしここで、そもそもなぜ (9a) と (9b) の 2 つのパターンがあるのかという疑問が生じる。そしてこれに答えるためには、これらの文の音調を詳しく見てみる必要がある。まず (9a) は 2 つのピッチ・アクセントを持っているので、2 つの音調句から成る文と考えられる。これに対して (9b) は全体が 1 つの音調句でできている文である。またそれぞれの音調は (9a) は下降上昇調と下降調、(9b) は下降調になる。音の高さ (pitch level) を H(igh), M(id), L(ow) で表せば、(9a), (9b) の音調はそれぞれ次のようになる。

- (10) a. H L M H L
 (↓ JOHNson)_{IP} (↓ DIED)_{IP}
 b. H M L
 (↓ JOHNson」 died)_{IP}

ではまず (10a) の音調から考えていこう。この下降上昇プラス下降という音調は、Topic-Comment の構造を持つ文に現れる典型的な音調である。確かに (10a) は Johnson という話題を新情報として提示し、それについて died という新情報をコメントしているという点で Topic-Comment の構造をしていると言える。また 1 つの音調句に 1 つの新情報が入っている点でも、音調と情報の対応はうまくいっている。しかしながら音声の観点からは、文全体が短いために、(10a) のように 2 つの音調句に分けて発話するのは経済的でなく不自然である。

これに対し、(10b) は短い文全体を 1 つの音調句で発話しているので音声として自然である。しかし 1 つの音調句ということは音調の核 (nucleus) も 1 箇所だけということになる。つまり次の (11) のような、1 つの音調句内で下降上昇プラス下降というパターンは許されないのである。

- (11) * H L M H L
 (↓ JOHNson」 DIED)_{IP}

そこで 1 つの音調句の場合は、(10b) のように、ピッチが変化する音調の核は Johnson に置かれ、そこから died の終わりまで文全体が下降調となる。その意味では文全体が下降調のピッチ・アクセントを

受けて焦点となっていると言えよう。これに対し、上で見た(7b)は、次に示すように下降調は焦点の Johnson で終了し、前提である died は強勢もなくそのまま低い音調で発話されるという点で(10b)とは異なる。

- (12) H L L
 (↓ JOHN_{son} died)_{IP}

以上のように考えてみると、従来の「(1b), (2b)」のような自動詞文では主語の名詞句に文強勢が置かれる」といった説明は不正確であると言える。実際は、強勢は主語にも動詞にも置かれ、下降調の音調が主語から始まって文全体に続くということである。このような文では主語も動詞も新情報であり、文全体が1つの焦点となっている。よって強勢は新情報を表し、ピッチ・アクセントは焦点を表すという一般化が成り立つ。

2. 不完全自動詞文の強勢と音調

では次に不完全自動詞を含む文について見よう。ここではSelkirk (1995: 560) があげている次の対照について考察する。

- (13) a. Your EYES are RED.
b. Your EYES are red.
- (14) a. Your EYES are BLUE.
b. *Your EYES are blue.
- (15) a. FIREMen are aVAILable.
b. FIREMen are available.
- (16) a. FIREMen are altruISTic.
b. *FIREMen are altruistic.

Selkirk は、目についての red や、available は、一時的述語 (stage-level predicate) であり、(13), (15) のようにアクセントがあってもなくてもかまわないが、目の blue や altruistic は個体的述語 (individual-level predicate) であり、(14), (16) のようにピッチ・アクセントが必要であると述べ、統語的な説明を示している。

しかし、単に述語の意味で分類しただけでは、なぜそれぞれのタイプの述語が音声的に異なる振る舞いをするのかという本質的な点が説明されない。また、この一般化に対する反例も存在する。第一に、次の (17), (18) に示すように **red** や **available** という一時的述語でもアクセントが必要な場合がある。

- (17) a. His EYES were all RED.
b. *His EYES were all red.
- (18) a. FIREmen aren't aVAIable now.
b. *FIREmen aren't available now.

第二に、逆に (19) のように個体的述語 *blue*, *selfish*, *fine* でもアクセントを必要としない場合がある。

- (19) a. I MARried you because your EYES are blue.
b. I love San FranCISco because its CLImate is fine.

また、このことを示す実際の発話例もある。

- (20) . . . (^I can't READ ↓ much of THINGS like ↓ that)_{IP} (^ANYway)_{IP} (cos my ^EYES are ↓ too
↓ bad)_{IP} . . .

(20) も London-Lund corpus からの実例であるが、目の悪さは一時的というより個体的な述語であり、上の一般化によればピッチ・アクセントが必要なはずであるが、実際には存在しない。以上のことから、述語の内在的意味による説明は当を得ているとはいい難い。

この問題も、1節で見た問題と同様に、強勢と音調についての細かい考察がないために生じていると思われる。まず(13), (15)の例は1節で述べた考え方で説明できる。すなわち、主語も述語も新情報であるため、それぞれに強勢が置かれる。そしてTopic-Commentの型で主語と述語をそれぞれの情報単位の焦点として発話すれば(13a)のようになり、また文全体を1つの焦点である1つの事柄として発話すれば(13b)のようになる。(13a), (13b)を詳しく表記すればそれぞれ次のようになる。

- (21) a. L H L M L H L
 (Your↑ EYES)_{IP} (are↑ RED)_{IP}
 b. L H M L
 (Your↑ EYES are↑ red)_{IP}

(21b)では強勢の置かれる最初の語 eyes から文末の red まで下降調が続き、それによって文全体が1つの焦点であることが示され、red に置かれた強勢がこの述語も主語と同様に新情報であることを示している。また(19a)は、目が青いという1つの事柄を結婚の理由として述べているのであって、文全体としては目という話題についてコメントしているのではない。そのために(21b)と同様の強勢と音調が適しているのである。(19b)も、気候が良いという1つの事柄全体が焦点になっている。さらに(20)も同様で、目が悪いことを読めないことの原因として述べているため、eyes から文末までが1つのピッチ・アクセントで発話されている。もちろん(20)でも too bad は新情報であるので強勢が置かれていることに注意されたい。

これに対し、(14), (16)の例は単一焦点でなく Topic-Comment の構造をしていると考えられる。目や消防士という話題を取り上げ、それについて青いとか利他的だと話者がコメントしているのである。よって Comment 部分は当然焦点であり、(14a), (16a)のようにピッチ・アクセントによって示されなくてはならない。(14a)の発話は詳しくは次である。

- (22) L H L M L H L
 (Your↑ EYES)_{IP} (are↑ BLUE)_{IP}

また(17a)は、(13a), (13b)と異なり、目が赤いという単一の事柄を相手に伝えているのではなく、彼の目について真っ赤だったと述べているのであるから、Topic-Commentの構造を示す音調がふさわしい。そのため(22)と同様の強勢と音調になるはずであり、(17b)のように重要なコメントの red にピッチ・アクセントがないのは伝達という言語の目的に反してしまう。

この節では、述語の一時性、個性性という意味論の区別に基づく説明は説明力に欠けるだけでなく反例が存在することを述べ、強勢と音調を詳しく見ることで事実を広く自然に説明できることを示した。

3. 結び

以上、完全自動詞文における主語の卓立、不完全自動詞文における述語の一時性・個性性という2つの問題について、強勢と音調を区別する立場から考察した。従来この区別が必ずしも明確でなかったことが議論を複雑にしていた原因の一つであったと思われる。強勢は新情報を表し、ピッチ・アクセントは焦点を表すといういわば分業システムになっていると考えることで、一見複雑に見える現象も、簡潔に説明することができる。これを反対方向から見れば、英語は強勢と音調という簡潔な2つの要素を組み合わせることで様々な表現を可能にしていると言うことができるだろう。

参考文献

- Schmerling, Susan F. 1976. *Aspects of English Sentence Stress*, Austin & London: University of Texas Press.
 Selkirk, Elisabeth. 1995. "Sentence Prosody: Intonation, Stress, and Phrasing," in John A. Goldsmith (ed.) *The Handbook of Phonological Theory*, Cambridge, MA: Basil Blackwell, 550-569.